

松村通信第132号

2022年11月1日

松村勝弘

『希望の歴史』『モラルの起源』

雑読 10月1日に「最近の東芝から見えてくるもの」という学会報告をして以来、それを学会誌報告用にまとめ直していたが、あれやこれやが気になって、また紹介された本などもあって、最近は雑読している。とりわけ、[1]ルトガー・ブレイグマン著・野中香方子訳『HumanKind 希望の歴史 人が善き未来をつくるための18章』上・下(文藝春秋、2021年)を読んでいたら、芋づる式に、[2]クリストファー・ボーム著;齊藤隆央訳『モラルの起源：道徳、良心、利他行動はどのように進化したのか』(白揚社、2014年)だとか、[3]亀田達也『モラルの起源—実験社会科学からの問い』(岩波新書、2017年)、さらには、[4]ジョナサン・ゴットシャル著、月谷真紀訳『ストーリーが世界を滅ぼす 物語があなたの脳を操作する』などという本にまで「飛び火」している。これらに共通しているのは狩猟採集民を研究している文化人類学である。以下、なれない領域なので、抜き書きにしかならないので、読みづらいかもしれないが、諒とされたい。

原点の人間=ヒト 亀田[3]表紙カバー袖でこのようにいわれていた。「私たちヒトは、うまく群れ生活を送っていきけるように、その心を進化させてきた。しかし、『群れ』や『仲間』を大きく越えて人々がつながる現代、私たちが対立を乗り越え、平和で安定した社会を築くにはどうしたらよいのか。」ヒトの原点は狩猟採集民にあるのでそこにまで目を向けると、「狩猟採集民の生活の大原則は非常に単純だ。仲間を結束させることは何でもせよ。仲間割れの元になるようなことはするな。分断の種を蒔くな。(食物、セックスパートナー、注目など)自分の分け前以上を独り占めするな。腕力に恵まれていてもそれを誇示するな。独りの才能や魅力的な容姿があっても他人にひけらかすな。つまりは、よい人間であれ」

(ゴットシャル[4]161頁)となる。人間の原点は平等主義だということについて、人類学者「ボームは2000年代初めに[2001年の*Hierarchy in the Forest*において]、狩猟採集民の生活の特徴が、たいていの人ならダーウィニズム[自然淘汰・適者生存説]から連想する他人にかまわず自分の身は自分で守る行動ではなく、ずっと優しい共同体主義と平等主義であることを示して有名になった。」([4]161頁)

なぜ共同体主義や平等主義だったのか。それはリスク対応の安全装置だったからだと思う。「狩猟採集社会における平等分配から、近代社会における社会保障や所得再分配制度に至るまで、社会的分配は、生存の脅威となるさまざまなリスクを、集団的に減らすための安全装置として機能しています。私たちが生きる社会生態学的環境の中で『事態がどの程度悪くなり得るのか』に気を配ることは、生き残りのための必須要件だと言えるでしょう。つまり、リスクのもとでの意思決定でも社会的分配でも共通して、人々は『不遇な状態の可能性』にとりあえず『身を置いてしまう』(その視点をつい認知的に取ってしまう)わけです。」(亀田[3]157頁)

リスク回避のための共同体 狩猟採集民であるクン族の例がボームによって紹介されている。長いが紹介したい。すなわち人類学者のリチャード・リーに依拠して狩猟採集民がいかに謙虚で自制的であったかがボームによって紹介されている。「クン族の狩人が狩りから帰ってくると、キャンプに残っていた人々は、自分たちの大好きな食べ物である肉が食べたくて、期待に胸を膨らませて何を仕留めたかと尋ねる。自慢して狩猟の達人を気取るそぶりを少しでも見せれば嘲笑されるとわかっている。狩人は自分の獲物のサイズや質にたいしたことがないという。はっきり物を言うガウゴという名のブッシュマンは、リーにこう語っている。『ある男が狩りに行ったとしよう。そいつは、帰ってきても「茂みででっかい獲物を仕留めたぞ!」と自

慢してはいけない。まず黙って座り、だれかがそいつの火のところへやって来て、「今日はどうだった？」と訊くまで待つ。そいつは静かにこう答える。「ああ、俺は狩りに向いていないね。何にも見つけなかったよ……まあほんのちっぽけなものならあったかな」。そしたら俺は、ほくそ笑む。奴がでかいのを仕留めたとわかるからね』

あるいはまた、トマジョという名高い治療師はこう語る。『若者が多くの獲物を仕留めると、自分を首長や大物だと思ってしまう。自分以外をしもべや劣った者と見なす。俺たちはこれを受け入れられない。自慢するような奴はお断りだ。いつかそんなうぬぼれでだれかを殺すことになる。だから俺たちはいつも、そいつの仕留めた獲物を価値がないかのように言う。こうして俺たちは、そいつの気持ちを冷ましておとなしくさせるんだ』

このため、たとえ大物を仕留めた狩人の胸が誇りで静かに膨らんでも、彼がとても謙虚に語ると、嘲笑しようとする手ぐすね引いていた平等主義の仲間、彼の控えめな態度を良しとして、狩人としても謙虚な人物としても尊敬することになる。」(ボーム[2]56-57頁)

「集団内の人々が本当に効率よく狩りをするには、きっとかなり平等に肉を分け合う必要があったはずで、気候の変化で地域の環境が厳しくなったとき、この効率の良さは集団や地域のレベルで生存にとって不可欠だったのではないか。」([2]384頁)狩猟採集民は平等主義的で、支配されることを嫌い([2]87頁)、大物ぶる奴、逸脱者、お調子者は集団の輪を乱すので排除された。それでこそ、気候変動のリスクなどを回避して人類は生き残ったのであった。

文明の呪い 人類が定住を始め、私有財産をもち、戦争をし、権力者がリーダーとして振る舞い出す。農耕のための土地をめぐる争いが戦争のもとになり、定住を始めて見知らぬ人に不信感を抱くようになって、人間は自らのコミュニティと所有物に、より関心に向けて、人類は世界主義者をやめて、外国人恐怖症になったという(ブレイグマン[1]上137頁)狩猟採集の時代には自由気ままに時間を配分できたが、農耕文明は休みを奪ったという。そして女性に重い責任を課したと

いう([1]上139頁)。まさに「文明の呪い」である。

さらに「お金の発明、文書の発達、法体制の誕生など、今日私たちが『文明化の印』として挙げるものは、抑圧の道具として始まった。」([1]上146頁)支配、抑圧の時代である。これは「文明の呪い」と言わざるを得ない。

権力の腐敗 「人間が一か所に定住し、私有財産を蓄えるようになった時から、集団本能は無害ではなくなった。資源が限られていることと階層性が結びついて、それは急に毒を持ち始めた。そして、ひとたびリーダーが軍隊を育てて思いどおりに動かすようになると、権力の腐敗は歯止めがきかなくなった。

農民と戦士、都市と国家からなるこの新しい世界で、わたしたちは他者への共感を外国人恐怖症との板挟みになり、多くは自らの集団への帰属意識を優先して、アウトサイダーを排斥した。この世界でリーダーの命令に背くのは難しかった。たとえその命令がわたしたちに歴史上の間違った道を歩ませることになるとしても。」(ブレイグマン[1]下63頁)

啓蒙主義、理性への期待 文明が問題含みであったとしても、後戻りはできない。「一七世紀初頭、現在『啓蒙主義』と呼ばれるものが始まった。

それは哲学的な革命だった。啓蒙思想家は、法の支配から民主主義、教育、科学まで、現代の世界の基礎を築いた。

一見、トマス・ホブズのような啓蒙思想家は、当時の司祭や牧師とあまり変わらないように見える。いずれも、人間の本性は墮落しているという前提に基づいて活動した。スコットランドの啓蒙思想家デイビッド・ヒュームの『人は皆、自分の利益しか考えない悪人と見なされるべきだ』という言葉は、啓蒙主義の人間観を一言で言い表している。

しかし、司祭や牧師と違って、啓蒙思想家は、利己主義を生産的に利用する方法があると説いた。人間には、そうした欠点を補って余りある天与の才があり、それが他の動物との大きな違いだ、と彼らは主張した。わたしたちが一縷の望みを託せるのは、この天与の才だ。

すなわち、理性である。

共感でも、感情でも、信念でもなく、理性。

啓蒙主義の思想家が唯一信頼したのは、理性、つまり、合理的な思考だった。人間は自らの生来の利己性を考慮に入れた知的な制度を設計できると、彼らは信じた。人間は自らの暗い本能を啓蒙的な層で覆うことができる、より正確に言えば、自らの悪い性質を利用して、公益に奉仕することができる、と彼らは信じたのである。

啓蒙思想家が肯定した罪があるとしたら、それは貪欲さだ。彼らはそれを『私悪すなわち公益』というモットーのもとに喧伝した。このモットーは、個人レベルでは反社会的な行動が、全体としては社会に利益をもたらす、という独創的な概念を表したものだ。啓蒙主義の経済学者アダム・スミスはこの考えを、古典となった著書『国富論』(1776年)で発表し、同書は自由市場の原則を擁護する最初の本になった。……『……(相手の協力を得るには)相手の人間性ではなく、利己心に訴え、自分が何を必要としているかではなく、相手にとって何が得になるかを説明した方がよい』(〔1〕下 64-65 頁)

「そして、今、理性の時代に入ってから数世紀が過ぎた。あらゆることを考慮すると、啓蒙主義は人類にとって勝利であり、資本主義、民主主義、法による支配をもたらしたと言わざるを得ない。統計の数字は明らかだ。わたしたちの生活は飛躍的に向上し、世界はかつてないほど豊かで、安全になり、人々は健康的になった。」(〔1〕下 67 頁)

とはいえ、最近では新自由主義が人間の放漫な本性を野放しにしてしまった。

良心、利他主義を思い出そう 狩猟採集民の時代に人の本性が発展させられ、人類は絶滅せず済んだことを想起しなければならない。ブレイグマンはいう「第1章で、何かを信じるとそれが現実になること、悲観論が自己成就的予言になることを見た。近代の経済学者が、人間は生来利己的だと仮定した時、彼らは利己的な行為を助長する政策を擁護した。政治家が政治は冷笑的なゲームだと思いつ込んだ時、それはまさにそうだった。

したがって、今、わたしたちは問わなければならない。そうでなければ、状況は違っていたらどうか、と。

わたしたちは、頭を使い、理性を活用して、

新しい制度を設計することができるだろうか。人間の本性についてこれまでとは異なる見解に基づく制度を設計できるだろうか。学校や企業、都市や国家が、異常な人間ではなく、最良の人間を想定したら、そうなるだろう。」(〔1〕下 70-71 頁)本書最後半 Part 4 でブレイグマンはそれを展開している。すなわち「ほとんどの人は利己的で強欲だという考え方は、他の人はそう考えているはずだという仮定から生まれたのではないだろうか。もしそうだとしたら、わたしたちは冷笑的な考え方を採用しながらも、心の奥底では、より優しく連帯感のある生活を求めているのではないだろうか。」(〔1〕下 83 頁)

人間は利己的だという前提で制度設計すると逆の結果をもたらす。「手術に応じて報酬を得ている外科医は、治療の質より、手術の数を重視する。弁護士の給与を勤務時間に応じて支払う法律事務所は、より良く働くよう弁護士を奨励しているのではなく、より長く働かせるだけだ。共産主義と資本主義のいずれにシステムにおいても、数の重視は、働く人のモチベーションを下げる。」(〔1〕下 92 頁)金銭的インセンティブはモチベーションを下げると思える。人間の性善を信じて制度設計をするべきだとブレイグマンは主張している。彼はエピローグにおいて、人生の指針とすべき10のルールを挙げている。すなわち(下記の頁数はすべて〔1〕下の頁数である)、

1 疑いを抱いた時には、最善を想定しよう

「誰かの意図が疑わしく思えたら、そうすればいいだろう。

最も現実的なのは、善意を想定することだ。つまり、『疑わしきは罰せず』である。たいていの場合それでうまくいく。なぜなら、ほとんどの人は善意によって動いているからだ。」(217 頁)

2 ウィン・ウィンのシナリオで考えよう

「許しに関する文学も、他者への寛容さが自分のためになることを強調する。それは人間の天分であるだけでなく、よい取引でもある。なぜなら、許すことができなければ、反感や悪意にエネルギーを浪費しないですむからだ。事実上、自分を解放することになる。」(219-220 頁)

3 もっとたくさん質問しよう

「他者が何を望んでいるかを、わたしたちは常に正しく理解しているわけではない。自分にはそれがわかっていると考えている経営者、CEO、ジャーナリスト、為政者は、他者の声を奪っているに等しい。テレビでインタビューされる難民をほとんど見かけないのも、民主主義とジャーナリズムがたいてい一方通行になっているのも、福祉国家が父権主義に染まっているのも、すべて、他者が何を望んでいるかを自分はわかっていると思い込んでいるせいなのだ。

それよりも、質問からする方が、はるかに良いだろう。」(220-221頁)

4 共感を抑え、思いやりの心を育てよう

「たとえば、あなたの子どもが暗闇を怖がっているとしよう。この場合、共感とは、子どもと一緒に部屋の隅にしゃがみ込み、声をひそめて話すことだ。一方、思いやりとは、子どもを落ち着かせ、怖がる必要はないと納得させることだ。」(223頁)後者の方が建設的だ。

5 他人を理解するよう努めよう。たとえその人に同意できなくても

「理性の力がとりわけ必要とされるのは、感じのいい人でいたいという欲求を抑制する時だ。わたしたちの社交的本能は、時として、真実と公正さの妨げになる。考えてみよう。わたしたちは、誰かが不当な扱いを受けているのを見ても、面倒な人間だと思われたくなくて、口をつぐむことはないだろうか。平穏さを保つために、言いたいことを呑み込むことはないだろうか。権利のために闘う人々を非難したことはないだろうか。

……彼らは、公の場で堂々と自説を主張できる、ずぶとい神経の持ち主だ。あなたを不安にさせる不愉快な話題を持ち出す人々だ。

このような人々を大切にしよう。彼らこそ、進歩の鍵なのだ。」(225-226頁)

6 他の人々が自らを愛するように、あなたも自らを愛そう

「わたしたちは人を区別する。えこひいきするし、身内や自分に似た人々のことをより気にかける。それは恥ずかしいことではない——それがわたしたちを人間にしているのだ。それでも理解しなければならないのは、他の人々、遠くの見知らぬ人々にも、愛する家族がいることだ。そして彼らもまた、あら

ゆる点でわたしたちと同じ人間であることだ。」(228頁)

7 ニュースを避けよう

視聴率を取るために悪いことばかりを報ずるニュースに気をつけるべきだという。「テレビとプッシュ通知を遠ざけ、オンラインでもオフラインでも、もっと繊細な新聞の日曜版や、もっと掘り下げた著述を読む。スクリーンから離れて人々と直に会う。心に与える情報についても慎重になる。」(230頁)

8 ナチスを叩かない

「ネオナチを殴っても、彼らを力づけるだけだ。彼らはそれを自分たちの正当性の裏付けと見なし、新兵の勧誘がしやすくなる。」(231頁)

9 クローゼットから出よう。善行を恥じてはならない

「善行は池に投げ込まれた小石のように、あらゆる方向に波紋を広げる」(234頁)から恥ずかしがらずに善行しよう。

10 現実主義になろう

「現在、現実主義者という言葉は、冷笑的同義語になっているようだ——とりわけ、悲観的な物の見方をする人にとっては。

しかし、実のところ、冷笑的な人は現実を見誤っている。わたしたちは、本当は惑星Aに住んでいて、そこにいる人々は、互いに対して善良でありたいと心の底から思っているのだ。

だから、現実主義になろう。勇気を持とう。自分の本性に忠実になり、他者を信頼しよう。白日のもとでよいことをし、自らの寛大さを恥じないようにしよう。最初のうちあなたは、騙されやすい非常識な人、と見なされるかもしれない。だが、覚えておこう。今日の非常識は明日は常識になり得るのだ。

さあ、新しい現実主義を始めよう。今こそ、人間について新しい見方をする時だ。」(236頁)

このように力強く、締めくくられている。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。
皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。
フェイスブックもやってます。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。